

地域づくり表彰

風の会（熊本県宇城市）

地道な活動が地域に種を蒔き花開

くための肥料となる

風の会

代表

もりた かよこ
森田 加代子



1. 宇城市の概要

宇城市は、平成17年に三角町・不知火町・松橋町・小川町・豊野町の5町が合併し誕生しました。熊本県のほぼ中央に位置し、有明海と不知火海に挟まれた宇土半島部と九州山地へと連なる中山間部、さらに熊本都市圏に接する平野部を有しています。このように変化に富んだ自然環境と都市機能を併せ持った地域です。



尻尾山から望む宇城市

宇城市には平成27年7月に世界文化遺産『明治日本の産業革命遺産』に登録された三角西港があります。三角西港は明治20年に開港し、明治22年には国の特別輸出港に指定され、九州の一大集散地として栄えました。その後、役割は衰退しましたが明治の三大築港(三国港、野蒜築港)のうち完璧に現存するのは日本でここだけです。

他にも、昔ながらの町屋が残る小川町商店街や土蔵白壁群のまち並みが残る松合地区など、歴史深く魅力的な場所がたくさんあります。



世界文化遺産「三角西港」

2. 活動開始の背景・経緯

小川町の商店街は、16世紀に薩摩街道に沿う宿場として地域の経済の中心地となっており、山手産物や海産物の集散地として繁栄していきました。

しかし、交通の拠点が変わり、商店街に陰りがみられていた中で、平成9年に大型ショッピングセンターがオープンしたことをきっかけに、小川町商店街の衰退に拍車が掛かりました。

そのような中、文化ホールが完成したことを機に、「文化活動で町おこし、町に文化の風を」をキャッチフレーズとして「風の会」が立ち上がりました。

活動の拠点を探している中、廃屋同然であった土蔵白壁造り「塩屋」を修繕し復活することが商店街の復活の一步であり「風の会」の大きな使命であると考え、塩屋の再建に向け女性9名で動き始めました。約2000万円にも上る修繕費やメンバー間の衝突などの問題を乗り越え、平成13年に修繕を終え、新たに「風の館・塩屋」と名付け、ここを拠点とした本格的な地域づくり活動が始まりました。



修繕前後の「風の館・塩屋」

3. 活動の広がり

「風の館・塩屋」を拠点に、演奏会や料理教室、石焼窯を使ったピザ・パン作り(親子食の体験塾)等、様々な活動を行っていましたが、団体内での活動に留まっており、商店街の人々は参加せず様子を窺っている状況でした。

しかし、平成18年に「男女共同参画推進事業」の大賞を受賞したことを機に周囲の関心が高まり、小川町商店街や商工会、農業女性グループなどと協力し、「来なっせ・観なっせ・遊ばなっせ」のキャッチフレーズで「体験のまちづくり」や「恵比寿祭り・スタンプラリー」を実施するなど、地域全体を巻き込んだ取組みに発展しています。

また、平成28年の熊本地震により、小川町も多くの被害を受けました。商店街は解体され空き地が目立つ中、このままではいけないと、店主や地元の若者たちと「刈萱(かるかや)の会」を発足し、商店街や地域全体の将来を検討しています。今後は、会ででた意見を基に、商店街の復活に向けた取組みを実行する予定です。

早速、「風の館・塩屋」の隣家が、地震後に空き家になったことをきっかけに、地元の若者が解体される商店から出される思い出の本を集め、「上町(かんまち)文庫」として、人々が憩える場所をオープンさせるなど、商店街の再建に向けた取組みが形として表れています。現在は、素人が演奏する「小川アマチュア de ナイト」を開催し、地域内外の交流の場になっています。

このように、「風の館・塩屋」は地元の若者や商店の所有者が気軽に立ち寄り、会合の場所になるなどの地域の拠点となっています。また、若者や空き商店の所有者など、多様な主体を繋ぐことが「風の会」の役

割であり、様々な活動に広がっています。



「小川アマチュア de ナイト」の様子

4. 継続性

「風の館・塩屋」で、様々な特技を持つ人やグループが地域を盛り上げるために、コンサートやマルシェ、ギャラリーなどのイベントを開催するようになりました。また、「風の会」が商店街の活性化に向けての研修や勉強会を主催し実施することで、多くの主体が地域づくりに興味を持ち、担い手の確保につながっています。

また、活動を持続可能にするためには楽しい活動の中でいかに自主財源を確保するかが重要です。「風の会」では、平成28年9月に商工会女性部の協力の基、地元特産品であるレンコンを使った「れんこん万十」を開発し、販売を始めました。この地震後の女性たちによる力強い取り組みは、新聞にも取り上げられ、多くの反響がありました。

平成29年には、東京にある熊本県のアンテナショップ「銀座熊本館」での販売も始まるなど、市内外への知名度向上に加え、自主財源の確保に貢献しています。



「れんこん万十」づくりのメンバー

5. 創意工夫

地域全体の魅力を知ってもらうことを目的に、小川町を訪れる人々に地元の資源を活かした体験をしてもらう「体験のまちづくり」を行っています。蒲鉾屋さんでの蒲鉾作り体験や寺院でのお念珠作り、農業体験など、地域の人々が参画する仕組みをつくることで、地域全体に地域づ

くりの意識が浸透しています。

また、会が所有する石焼釜を活用し、地元農産物を使ったピザやパン作り体験を実施しています。特に小中学生を対象とした、地域の食材に触れる「親子 食の体験塾」を開催し、子供の食育につながるるとともに、地域へ愛着を持ってもらうことができます。



「食の体験塾」が子供の成長に繋がる

6. 成果

地元小学校と協力し、小学生がメニュー作成から接客までを行う「子供レストラン」を毎年開催しており、近年は小川町の初市に合わせて開催しています。商店街の衰退に付随し衰退傾向にあった初市でしたが、子どもと地域行事に取り組むことで、地域全体の賑わいを取り戻すとともに、地域の良さを改めて知る機会となっています。

また、熊本地震により、かき氷屋さんさんが営業を辞められたのを機に、「風の館・塩屋」に機械設備を取り入れ、昨年夏祭りから販売を開始しました。商店街の中心でかき氷やソフトクリームが食べられるようになったため、子供達やその家族が大勢集まり、地震で疲弊していた商店街や地域の人達が息を吹き返したように明るい笑顔があふれました。子供達や若者があまり立ち寄りなかった商店街に、子供レストランや食の体験塾などの小中学生の体験の場を提供することで商店街全体が盛り上がり、地域に新しい風が吹き始めました。



子供たちが集う場所となった商店街

7. 課題と展望

現在活動している「風の会」のメンバーは加工品づくりや、「風の館・塩屋」に来る子供達と話をすることが大好きなとっても元気なおばちゃんたちばかりです。そんなおばちゃんたちが「風の会」の活動を支えています。

団体の高齢化により、新たな担い手の確保が必要であるとの声もありますが、風の会は、様々な企画を提供している地域の若者や、学校関係、商工会など多様な主体同士を結びつけ、地域が一体となって盛り上げるための拠点として活動していきたいと思っています。

また、団体に若者を増やすのではなく、商店街の将来を考える「刈萱会」の取りまとめなど多くの人が集い出会う場所として今後も持続可能な活動体制を作り上げていきたいと思っています。



「夏祭り」で「風の館・塩屋」人が集う様子

8. 最後に

風の会は高齢者の活動の場をさらに広げ、笑顔で輝いて働く場所であり、地域活性化の一役を担っている意識と誇りと責任をもって活動しています。そして、地道に活動を続けていくことで「風の館・塩屋」が拠点となり地域全体に年代を問わず広がっています。

熊本地震の発災により、「風の館・塩屋」の修繕など、多くの問題を抱えました。しかし、大きなダメージではなく、地域がさらに大きく伸びるための、新しく生まれ変わるための出来事と受け止め、「風の会」と地域がより絆を深めて「風の館・塩屋」から力強いメッセージ発信する事で、日本の中の熊本県宇城市の衰退しかけた小さな町でも、誰もが輝いて暮らす、高齢者から若者や子供たちまで笑顔で暮らせる、豊かで情のある新しい地域、それを目指して地域づくり活動を続けて行きます。